

国文学研究資料館 共同研究（特定研究） 研究成果報告書

# 万葉集伝本の書写形態の総合的研究 論文編

# 目次

はじめに

『歌枕名寄』所収萬葉集仮名表記長歌について

— 非仙覚本と仙覚本の間をつなぐもの —

『萬葉一葉抄』と京都大学本『萬葉集』

— 寛元本的性格をめぐって —

『萬葉集』寂印成俊本系統の書式について

陽明文庫所蔵「古活字本万葉集」の紫による書入訓について

— 京大本代赭書入との比較から —

下河辺長流の見た万葉古写本

— 三条西家本復元の試み —

高知県立高知城歴史博物館蔵『万葉集古義』に見る諸本

田中 大士

..... 4

樋口 百合子

..... 9

池原 陽斉

..... 23

野呂 香

..... 37

大石 真由香

..... 49

眞野 道子

..... 61

城崎 陽子

..... 65

## はじめに

当共同研究「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」は、国文学研究資料館の共同研究（特定研究）として平成二六年四月から開始された。大正末年に刊行された『校本万葉集』以降永らく低迷していた万葉集の伝本研究が近年ようやく活気を取り戻していることを承けて、万葉集の伝本研究のさらなる活性化と、近年築かれつつある新たな伝本の枠組みに基づく万葉集の伝本のハンドブック『新万葉手鑑』作成を主たる目的としている。『新万葉手鑑』は、現在、共同研究の構成員をはじめとする各メンバーからの原稿がそろい、全体の内容の点検を行っている最中であり、平成三〇年三月に刊行予定である。

当共同研究は、『新万葉手鑑』刊行のほかに、万葉集伝本研究の活性化を目指して活動を行ってきたが、こちらの方も大きな成果を得つつある。この三年の間に、研究会に参加する研究者は少しずつ増え始め、当初の構成員以外にも研究の主力として活躍している面々もいる。年数回行っている研究発表会では、力のこもった発表が相次ぎ、その内容が学会誌に掲載された事例も一二にとどまらない。実際、近年、当共同研究の参加者達の研究発表、論文は、万葉集関係の学会、学会誌を賑わせており、稿者が、この共同研究の発足の頃、万葉集の伝本研究は、研究分野として認知されていないと嘆いたことが嘘のような盛況ぶりである。

## 共同研究代表者 田中 大士

上記のごとく、研究会での成果は、学会誌などに公表済みのものも多いが、この三年の間の研究発表は多く、いまだ公表されていない成果もある。特に、学会誌には自ずから枚数制限があり、掲載のかわらない規模の発表もある。そこで、当共同研究は、「研究報告」として、枚数にこだわらず、研究の詳細を公表する場を設けた。ここに掲載された論文・報告は、いずれも力作揃いであるが、ことに京大本代赭書き入りを扱った野呂香「翻刻 京都大学附属図書館所蔵『曼朱院本萬葉集』(4-23/マ/2貴別) 卷一―五」は、従来資料としていささか認知困難であった同書き入りをいかに可視化するかに腐心した労作である。この資料は、必ずや今後の万葉集伝本研究において重要な役割を果たすものと確信している。是非ご一読願いたい。

### 共同研究「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」の概要

当共同研究は、平成二六年度から平成二八年度までの三年計画で国文学研究資料館の特定研究として開始された。以下はその概要である。『万葉集』研究は、古典作品の中でも、研究者人口が多く、活発に研究が行われている分野の一つである。伝本研究においても、大正一四年刊の『校本万葉集』により、他の古典作品に先んじて研究の礎

が築かれ、きわめて恵まれた研究環境にあるといえる。ところが、伝本研究においては至れり尽くせりの感がある『校本万葉集』の存在故に、それ以降の研究は振るわず、諸伝本の研究は、長い間『校本万葉集』首巻の記述の水準のまま留まっていたといつてよい。それに伴い、『万葉集』の研究者における諸伝本に対する関心はきわめて薄くなり、『万葉集』の諸本研究は、すでに『万葉集』の研究領域の一つとは認識されていないかのような観さえある。しかし、近年、廣瀬本万葉集の発見という画期的な出来事以降、『万葉集』の伝本研究はいささかの進展を見せている。この機に、『万葉集』の伝本研究の研究者を集め、これまでの研究成果を検討し直し、従来の諸伝本の研究を一新しようという試みである。さらに、その成果を、『万葉集』の研究者、あるいは国文学研究者、愛好者などにも理解してもらえようような簡明、明快な『万葉集』伝本の概説書としてまとめ、ひろく『万葉集』の伝本の知識を学界共有の財産にしたいと考えている。

#### 〈構成メンバー〉

田中大士（日本女子大学教授・代表）  
小川靖彦（青山学院大学教授）  
城崎陽子（國學院大學兼任講師）  
新谷秀夫（高岡市万葉歴史館学芸課長）  
景井詳雅（洛星中・高等学校教諭）  
池原陽斉（東洋大学非常勤講師）

現在、『万葉集』の伝本研究、万葉集の享受史研究の最前線に立つ研究者を集めている。年齢構成は、中堅から若手までバランスを保つように考慮している。なお、この三年間の活動において、研究会に参

加するメンバーは増えている。

#### 〈研究の方針〉

『万葉集』は、伝本により、題詞の高さ、訓の仮名の種類、付訓形式などに違いが見られ、それらは、本文以上にそれぞれの本の伝来上の特徴と抜きがたく結びついている。また、これら諸本には、多くの書き入れが見られ、それらもまた、伝本間の関係を知る上では有力な証拠となっている。これらの諸特徴については、そのほとんどが、すでに『校本万葉集』首巻において指摘されているが、ほとんどの伝本においては、『校本万葉集』以降に十分な再検証が行われていない。また、『校本万葉集』の諸伝本における記述は、伝本間の分類、系統分けに十分に活かされていない。そこで、今回、『万葉集』の主要な伝本において、構成員が分担を決めて実地調査を行い、『校本万葉集』の記述を再検証する。実地調査以外にも、後述するように、万葉集の諸伝本には、朱や代赭、紺青などの色つきの書き入れが多く見られるので、それらを詳細に確認するために、高精細のカラー写真をあわせて利用する。それらの調査結果を、近年の系統的研究の成果に組み込み、新たな諸伝本の見取り図を構築しようとするものである。

一方、『万葉集』の伝本は、伝来の過程で、類題別に編集し直されたり、平仮名、片仮名だけに書き換えられたりもしている。そのような、『万葉集』が変容して行く側面にも焦点を当て、従来あまり注目されなかった諸書の研究をも行う。

#### 〈成果の公開〉

本研究の最終的な成果は、『万葉集』の諸伝本を、図版によって、

題詞の高さ、訓の種類、付訓形態などを示しつつ、系統上の性格などを解説する簡明な解説書を作成することである。これまで、同種の試みとしては、佐佐木信綱『万葉手鑑』（昭和二年）がある。本研究は、この書の全面的な更新を目指している。『万葉手鑑』は、『校本万葉集』の成果を受けているため、系統上の分類については言及がない。今回の試みでは、分類上の解説についてもわかりやすい説明を付す予定である。さらに今回の新機軸は、諸伝本に見られる朱や代赭などの書き入れについて、カラー写真で掲載し、その点について詳述する点である。『万葉集』の諸伝本には、様々な墨色の書き入れが存し、その色について重要な意味がある。また、仙覚校訂本においては、訓の墨色と位置とに仙覚の精妙な意図が見出せる。昭和二年刊行の『万葉手鑑』はもとより、『校本万葉集』（諸本輯影）や『古筆学大成』など、万葉集の図版を扱った従来の諸書においては、様々な制約からカラー写真は稀で、その墨色についての解説は十分とは言えなかった。今回の更新版では、一目で色分けが分かる図版とともに、明瞭な解説で、色分けの意味も理解出来るよう工夫を行う。

#### 〈研究の意義〉

本研究は、上記の新たな『万葉手鑑』作成の過程であると言ってよい。『万葉集』伝本の専門家が、それぞれ得意な分野の伝本を担当し、新たに調査を行うことによつて、これまでの伝本観を一新する成果が期待される。それらの成果は、最終的には、上記の解説書にまとめられるのであるが、その過程で、成果は、構成メンバーの中で討議され、重要な成果は、まず、研究報告として公表される。当共同研究が終了する三年間には、数多くの新たな研究成果が公表されることが期待さ

れる。最後に公表される解説書は、それらの研究、討議の末の研究の“精華”であると言つてよからう。

『万葉集』の伝本研究は、単に不振と言うだけではなく、研究者個々が孤立しがちで、相互にそれぞれの研究を討議する機会が少なかったという問題点があった。本共同研究では、個々の調査、研究を持ち寄り、多くの討議の機会を持つことにより、意見交換の場を増やし、それぞれの成果を共有化することを目指している。また、解説書を作成することにより、伝本研究の最新の成果を、他の万葉研究者、国文研究者と共有することを目指す。また、他の時代の伝本研究との風通しが必ずしもよいとは言えない『万葉集』の伝本研究を、より一般的な水準に近づけ、また、近年進展が著しい書誌学や古筆学と有効に連携出来るようにすることを最終目的と考えている。

#### 〈研究会の開催〉

本共同研究の意義の一つとして、個々のメンバーが新たに調査、研究した成果を、全体で討議する点が挙げられる。そのための場として、年二回の研究会を計画している。この研究会で、個々の研究の成果が発表され、最終的な解説書への原案が練られて行く。

#### 〈研究活動〉

◎平成二六年度

・研究会

第一回研究会

平成二六年八月二九日（金）国文学研究資料館 第三会議室

一 『新万葉手鑑』作成の方法についての討議

二 田中大士「仙覚校訂本の古筆切の活用」

京都国立博物館

第二回研究会

平成二六年一月二六日（金）国文学研究資料館 第三会議室

- 一 池原陽斉「西本願寺本赤人集成立考」
- 二 景井詳雅「仮名本万葉集の一種、久世切系統の抄出本万葉集について」

第三回研究会

平成二七年三月六日（金）国文学研究資料館 第一会議室

- 一 嘉村雅江「斯道文庫蔵「類聚古集抄切」調査報告」
- 二 小川靖彦「仙覚新点のめざしたもの」
- 三 城崎陽子「土佐山内家宝物資料館蔵『万葉集古義』が見た諸本―本居宣長記念館蔵「手沢本『万葉集』」との対校―」

・資料調査

平成二六年四月一九日 田中大士 京都女子大学・北村美術館

平成二六年九月四～五日 野呂 香 京都大学附属図書館  
 平成二六年一〇月四～五日 嘉村雅江 金沢市文化ホール  
 平成二六年一〇月三〇日 野呂 香 東京国立博物館  
 平成二六年十一月二七日 野呂 香 東京国立博物館  
 平成二六年二月七～九日 城崎陽子 土佐山内家宝物資料館  
 平成二七年一月二九～三〇日 野呂 香 京都大学附属図書館  
 平成二七年三月一九～二〇日 野呂 香 京都大学附属図書館・

◎平成二七年度

・研究会

第四回研究会

平成二七年八月二八日（金）国文学研究資料館 第二会議室

- 一 大石 真由香「陽明文庫所蔵『古活字本万葉集』書入の性格」
- 二 樋口 百合子「細川本『歌枕名寄』に見る万葉集長歌の享受とその特質」

第五回研究会

平成二七年十二月二五日（金）国文学研究資料館 第二会議室

- 一 田中大士「柘枝切の新出資料―柘枝切は寛元本か―」
- 二 高松寿夫「伊達文庫本万葉集調査報告」

第六回研究会

平成二八年三月一八日（金）国文学研究資料館 第二会議室

- 一 『新万葉手鑑』原稿の発表及び検討

・資料調査

平成二七年九月一七～一八日 嘉村雅江 天理大学附属天理図書館  
 平成二七年一〇月三十一日 野呂 香 石川武美記念図書館  
 平成二八年一月二〇～二一日 野呂 香 京都大学附属図書館  
 平成二八年三月一～二日 野呂 香 京都大学附属図書館

◎平成二八年度

・研究会

第七回研究会

平成二八年八月二八日（金）国文学研究資料館 第二会議室

一 『新万葉手鑑』原稿の発表及び検討

第八回研究会

平成二八年一二月一〇～一一日

日本女子大学（目白キャンパス）百年館高層棟八階 日本文学科

八一五室（日本女子大学学術交流企画との合同研究会）

一 乾善彦「シンポジウムの予想される問題点」

二 「万葉集「九十余首なき本」について」の討論

三 『新万葉手鑑』原稿の検討

・資料調査

平成二八年六月二二日 景井 詳雅 石川武美記念図書館

平成二八年九月一二～一四日 野呂 香 京都大学附属図書館

平成二八年一一月七日 野呂 香 東洋文庫

平成二八年一一月一〇日 野呂 香 宮内庁書陵部

平成二八年一一月一六日 景井 詳雅 神宮文庫

平成二八年一一月一六日 野呂 香 石川武美記念図書館

平成二八年一一月二二日 景井 詳雅 国文学研究資料館

平成二八年一一月二五日 景井 詳雅 蓬左文庫

平成二九年二月一～二日 野呂 香 京都大学附属図書館

執筆者一覧（掲載順）

田中大士 日本女子大学 教授

樋口百合子 奈良女子大学古代学学術研究センター 協力研究員

池原陽斉 東洋大学 非常勤講師

野呂香 国文学研究資料館 機関研究員

大石真由香 日本学術振興会 特別研究員

眞野道子 名古屋大学 非常勤講師

城崎陽子 國學院大學 兼任講師



国文学研究資料館 共同研究（特定研究）研究成果報告書  
万葉集伝本の書写形態の総合的研究 論文編

平成二十九年（二〇一七）三月十七日印刷

平成二十九年（二〇一七）三月二十七日発行

編集 共同研究（特定研究）

「万葉集伝本の書写形態の総合的研究」

研究代表者 田中 大士

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒一九〇一〇〇一四

東京都立川市緑町一〇一三

印刷 前田印刷株式会社